

アフリカにおける地域性の形成をめぐる

掛 谷 誠

アフリカという巨大な大陸の地域性を考える場合には、この広さ自体の捉え方が問題になる。その大陸性ゆえに、地域的なまとまりがあるようにイメージされるが、それは西洋列強による奴隷交易、及び植民地化の歴史を通じて、アフリカというまとまりが外部から与えられてきた側面が非常に強い。

私自身は人類学の出自であり、アフリカの乾燥疎開林帯に住むバントゥ語系の農耕民を主たる対象として、調査を進めてきた。乾燥疎開林帯は、サハラ以南のアフリカの $\frac{1}{4}$ を占める植生帯だが、巨大なアフリカ大陸にとっては、いかにも部分的である。その意味で苦慮する点が多いが、この報告では今までの経験をふまえつつ、バントゥ系諸民族の居住域の一部として乾燥疎開林を位置づける視点を加え、アフリカの地域性の問題を考察していきたい。

アフリカの自然環境は、赤道直下のコンゴ盆地やギニア湾岸沿いに発達した熱帯多雨林を中心に、馬蹄形を重ねるかのように、乾燥疎開林、サバンナ、ステップ、半砂漠、砂漠と続いていく。それぞれの植生帯は、山系や水系などの地形的条件に対応した変異を含みながら、広大なひろがりを持っている。

このような環境下で、人々は自然に強く依存した生業によって生活を支えてきた。湿潤な熱帯多雨林では、ヤムやキャッサバ、バナナなどの根栽型、あるいは栄養繁殖型の作物を中心とした焼畑農耕や、豊かな動植物資源を直接利用する狩猟採集が基本的な生業である。乾燥疎開林帯からサバンナ、ステップと移るにつれ、トウモロコシ、シコクビエ、ソルガム、トウジンビエなどの穀物を主要作物とする焼畑農耕や鋤農耕に変わり、乾燥の度合いが増すにつれて、半農半牧やウシ遊牧が重要な生業となる。さらに半砂漠、砂漠に至れば、ラクダ遊牧が優勢となる。乾燥地帯でも、限られた分布域内だが、狩猟採集に依存した生活様式が現在でも見ることができる。ニジェール河やザイール河などの、大河のほとりや湖沼域では、漁撈が重要な位置を占める。これらの自然に強く依存した生業は、800を超えると推定される民族によって担われているが、このようなアフリカのエスニックグループの境界域は、極めて曖昧なものである。

次にサハラ以南のアフリカの広大な地域に分布する、バントゥ語系諸民族をとりあげてみよう。アフリカ大陸は大きく四つの語族に分類できるが、その中のコンゴ・コルドファン語族の下位分類として、ベヌエ・コンゴ語群があり、バントゥ諸語はそこに属している。バントゥ諸語は数百に及ぶとされており、その分布は赤道周辺域から南部のほとんどを占め、非常に広範

囲にわたっているが、一方で共通した言語的特性を保有している。これは、原バントゥのグループが移動拡散した結果、バントゥ諸言語が形成されたことを物語っている。

バントゥは、現在のナイジェリア・カメルーンの国境地帯を源郷とし、紀元前数世紀（一説では紀元前1000年とも言われる）に源郷地を離れて大移動を始めた。彼らはヤムやアブラヤシなどの作物をとめない、コンゴ盆地の熱帯多雨林に入っていった。あるいは多雨林の北縁を東に進み、サバンナ域へと広がっていった。その時に、ソルガム、シコクビエ、トウジンビエなどの、アフリカ起源の雑穀栽培を取り入れていった。

特に紀元前3世紀前後に、鉄器の使用が普及し始めてからは、急速に拡散が進むことになる。熱帯多雨林では先住民である狩猟採集民のピグミーが道先案内役を果たし、彼らとの共生関係を保ちながら展開し、サバンナ域ではコイ・サン（ブッシュマン）系の狩猟採集民を徐々に辺境の地に追いやりながら進行していったと思われる。

5世紀頃には東南アジア原産のバナナが流入し熱帯多雨林帯での重要な基幹作物となった。サバンナを東に進み、さらに南へと拡散していった東方バントゥの中には、その移動の過程でウシ飼養を取り込んだグループもある。そして、10世紀までには赤道アフリカ周辺域から南の大半部まで、居住地を広げていった。16世紀以降には、ポルトガルによって持ち込まれたトウモロコシ、キャッサバなどの、新大陸起源の作物がひろまった。

こうした移動、定着の過程で、バントゥは数百の言語集団に分化していき、熱帯多雨林から乾燥疎開林、サバンナ、ステップ、半砂漠まで、アフリカのほとんどの植生帯に住み、農耕を主としつつも、半農半牧、牧畜、漁撈などの、多様な生業を営む民族に分かれていった。それは、いわば文化的な適応放散の過程であった。

その主たる生業である農耕も、主要作物のバラエティとともに、その農法や環境利用の形態においても様々な変異が見られる。焼畑農耕が一般的ではあったが、ザンベジ河の氾濫原での農耕や肥沃な土壌のもとでバナナ栽培をするガンダなどの定着農耕、パレやチャガなどのような、山地帯での土着灌漑による農耕など、集約的な農耕を発達させた所もある。

社会編成やその統合の形態も多様である。15世紀以降になると、ザイール河の河口域にはコンゴ王国が栄え、ギニア湾岸に到来したポルトガルと交易関係を持ち、それによって王国が興亡していった。南のサバンナ帯にはルバやルンダなどの王国も形成された。また、ザンベジ河の氾濫原域ではロジ王国、乾燥疎開林帯にはベンバ王国が展開するなど各地で集権的な王国の発達が見られた。しかし、より広範な地域には、集落連合体や小首長制など、小規模で、統合の度合いも緩やかな社会が分布していたと考えてよい。

乾燥疎開林は、熱帯多雨林とサバンナの中間に位置する、一種の生態的遷移帯である。年間が乾季と雨季に明瞭に分かれるという気候的特性を持っている。そこは一般に低人口密度の生態ゾーンだが、バントゥ語系の多くの民族が居住している。彼らは農耕を主要な生業とし、シコクビエ、ソルガムなどのアフリカ起源の作物、トウモロコシ、キャッサバなどの新大陸起源の作物を耕作する焼畑農耕を営み、狩猟採集、あるいは漁撈にも依存して暮らしをたててきた。乾燥疎開林帯の大部分は、眠り病を媒介するツェツェバエの分布域と重なり、牛飼養は発達しなかった。

乾燥疎開林の焼畑農耕は、各民族が練り上げてきた環境利用や農法に応じて、多くのバリエーションがある。西部タンザニアに住むトングウェは、乾燥疎開林帯に居住しているにもかかわらず、基本的には森林利用型の焼畑農耕を営む。北ザンビアを居住域とするベンバは、チテメネ・システムとよばれる、疎開林利用型の焼畑農耕を発達させてきた。それは、乾期に疎開林の枝をはらい、伐採地の中心に積み上げて、雨期が始まる前に火を放ち、焼畑を造成する農法だ。この耕地では、混作と輪作を組み合わせ、4～5年間、作付けが行われる。

南西タンザニアに住むマテンゴは、山地の疎開林をシコクビエの焼畑耕地として開墾した後、その草地を利用したピット（掘り穴）耕作という、特異的な、かつ集約的な半常畑耕作に従事している。雨期の終わりに近づいた3月、山腹に繁った草を刈り取り格子状に並べ、格子の間の土を掘り起こして草の上にかぶせる。こうして格子状の畝とピット（掘り穴）のセットからなる耕地ができあがる。畝の部分にインゲンマメを蒔き6月に収穫する。雨期が始まる11月には、雑草を取り除いてピットに投げ入れ、畝にはトウモロコシを植え付ける。翌年にトウモロコシを収穫した後は一旦休耕し、3年目に畝とピットの位置を変えて同様の耕作サイクルを繰り返す。

これらの民族の伝統的な社会編成も、かなりの変異を示している。トングウェは、約200年前に異域に住む諸民族が移住し、混住して形成されたという伝承を持つ。彼らの社会は、そのような出自伝承を共有する父系の親族集団の緩やかな連合体である。

一方、ベンバ社会は母系制を原理としており、植民地以前には一人のパラマウント・チーフを頂点とする王国を形成していた。彼らは現在のザイール南部に栄えた、ルバ王国の後裔であるという伝承を持ち、17世紀の中頃に現在の地に移住し、徐々に周辺の諸民族を侵略していった。19世紀後半には、インド洋岸のアラブ・スワヒリとの長距離交易を契機として、急速に領土を拡大し、一大王国を作り上げたのである。

マテンゴは、トングウェと同様に移住してきた諸民族の混住によって形成され、父系の親族

集団を基礎とする分節的な社会編成を保っていた。しかし、19世紀の中頃に、南アフリカのズールー王国から派生したンゴニが、急速に北方へと侵略を始め、マテンゴの領域にまで侵入してきた。これに対抗するために、マテンゴの人々は山地の中心域に集住し、特異なピット耕作を発達させていったと考えられる。

ここでは、疎開林帯の三つの民族の概要を述べたにすぎないが、長距離交易や他民族との動的な関係の歴史を背景としつつ、それぞれの民族が乾燥疎開林に適応した生業様式、社会、文化を練り上げ、独自の「風土」を形成してきたことを物語っているとと言えるだろう。

この三民族の形成史は、ともにバントゥの大移動の系譜につながると言えるだろう。バントゥの住む領域には、広大な人口希薄地帯、あるいは政治の空白地帯があり、一旦、そういう地域に分布したバントゥが、再び分離し、移動し、融合して新たな民族を形成していったと考えられる。せいぜい200～300年程度の歴史しか持たない民族も、非常に多く存在しているのだ。

さて、トングウェとベンバは、伝統的な社会編成の形態においては、際だった対照をみせたが、村レベルの生活では共通する点が多い。彼らは、耕地と集落の移動を組み込み、自然自体の土壤肥沃度の回復力に依存しつつ、うすく広く環境を利用する焼畑農耕をベースにしている。また自然は狩猟・採集・漁撈の場でもあり、彼らは自然利用のジェネラリストとして位置づけられる。村における生計経済は、自給を大幅に越えた生産や蓄積を避け、経済的な差異を最小化、平均化する傾向性をもつという特徴が見られる。

それは、精霊や祖霊への恐れ、あるいは妬みや恨みに起因する呪いへの恐れと結びついている。これらの諸特徴は移動や分散、あるいは分節的な特徴をもつ社会動態と連動している。こうした生態・社会・文化の複合は、エキステンシブな生活様式という言葉で総括できる。

呪力や霊力への信仰は、一方では互酬的で平等的な生計経済と結びつくが、他面では親族集団の長や、首長の権威の源泉でもある。トングウェの社会では、この二つの側面がバランスを保ち、親族集団の緩やかな連合体を維持していくが、ベンバ社会では、長距離交易による威信財の集積が首長の権威を増大させ、「聖なる王」としての性格をもつ最高首長を頂点とし、集権的な政治体制が構築されていったと考えることができる。

日本におけるアフリカ研究の先達である富川盛道氏は、伝統的なアフリカ社会を「部族本位制社会」と捉えている。「部族社会」とは、「分離原理と共存した集中原理で、全体がゆるやかに結ばれる流動的な社会」である。あるいは「ある条件下では集中して統合するが、許されるかぎりには、分散の原理を通して安定しようとする社会」である。ベンバやトングウェも、このような意味での「部族社会」であり、集中・統合と分散・分離の原理が機能する条件の違い

に応じ、対照的な社会編成・統合を示してきたと言えるだろう。

富川氏は、「部族社会」が、他部族との間で物々交換、交易、婚姻、同化あるいは、対立、抗争、分離を含む相互関係を保ちながら、ローカルな地域社会を形成したことを強調している。トングウェ、ベンバ、マテングという民族、あるいは部族の形成史も、地域集団としての部族社会を例証していると考えることができる。

乾燥疎開林帯を生活の場としてきた諸民族は、このようなエキстенシブな生活様式と、小規模で統合の度合いが緩やかな流動性の高い社会を保持してきた。このような伝統を基調としながら、かつ他の民族や長距離交易を媒介とした外文明との動的な関係の中で、集約的な環境利用や、集権的な社会編成も発達させてきた。いわば乾燥疎開林帯は、多彩な「風土」に生きる諸民族が、協同と対立の二側面を含みつつ住みわけ、流動的な共存関係を展開する空間であった。あるいは多様な色合いをもった小世界の流動的共存空間であると言ってもいいだろう。

それは、バントゥの文化的な適応放散が展開した場の、基本的な構造をも示している。こうした空間の存在様式は、高谷流の「世界単位」で言うような「歴史の中に現れた重要そうな領域」、「それ自体が意味のある地域単位」として範域を設定するような思考法とは馴染みにくい、というのが現在の私の思いである。

コメント

栗 本 英 世

我々アフリカ研究者にとって、具体的な調査対象となるのは、民族全体というよりは、むしろ個人や特定の村である。それとアフリカという広大な地域の間にはたいへん大きなギャップがある。両者の間にいろんな単位を設定することは可能だ。ひとつは、バントゥ語系の諸民族というような言語集団の単位である。また、リージョンという単位も設定できるだろう。あるいは植民地化以降の近代的な国家は、政治学や経済学ではたいへん重要な単位になっている。もちろん生態系の区分に基づいた場合は、アフリカの生業の区分とよく対応するだろう。このように対象の階層化、あるいは分節化は、研究分野によって違ってくる。地域の存在様式は基本的に非常に多様であり、しかも重層的である。

掛谷さんは「多様な色合いをもった小世界の流動的共存空間」と述べられ、富川さんの「部

族本位性社会」を引用された。部族が非常に明確な集団として存在しているという印象を与えがちだが、実は「多部族的社会圏、多部族的共生社会」というものとして、地域社会が存在しているという捉え方であろう。そこにアフリカ的な特性があるとすれば、他の地域に見られるような、求心力を持つ帝国や、大宗教のような伝統というようなものは見られない。それは、強力な中心のない地域社会という存在様式であると考えられる。

では、我々の調査の単位である民族の境界を越えた、リージョナルな制度があるのではないか。ここでは三つだけ例をあげておく。ひとつは、交易である。それも外文明とつながるような長距離交易ではなく、アフリカの内陸部で植民地化以前に存在した、非常に自生的な交易のネットワークである。二番目には、現在のザンビアやジンバブエの地域における、カルト宗教と呼べるようなハイ・ゴッドの信仰である。それは現在の国境や民族の境界を越えて、いまなお続いている。R・ウエーブナーという人類学者は、それは大伝統でも小伝統でもなく、その中間のものであると述べている。中範囲の伝統とも言えるようなものが、アフリカの特徴として挙げられるだろう。また、スーダンの南東部では言語・民族の違いを越えて、非常によく似た階梯式の年齢組織が発達している。これもリージョナルな制度の一つの例としてあげられるだろう。

このような地域を設定する上での、認識論的な問題について、コメントを加えておきたい。例えば、我々は東アフリカの研究者、西アフリカの研究者という言い方をするが、それは植民地化以降の境界の影響を受けている。旧イギリスの英語圏だけに限って問題を指摘すれば、D・パーキンというイギリスの人類学者が言うように、現在のザンビア、ローデシア、マラウイを中心にした中央アフリカと、ウガンダ、ケニア、タンザニアなどの東部アフリカ、それから南部スーダンという「民族誌的な地域」があるが、これは植民地時代のアフリカの区分けに、大きく規定されている。

それぞれに植民地の本国が作った研究所があり、中部アフリカにはローズ・リビングストン研究所（現在はザンビア大学の一部）、東部アフリカにはウガンダの東アフリカ研究所（現在はマケレレ大学の一部）があった。一方で、南部スーダンには研究所がないものの、オックスフォードの人類学者たちの独壇場であった。

バントゥなどの諸集団は境界を越えて分布しており、実際には連続した世界があるにもかかわらず、植民地の境界と一致するこの地域分けは、妥当な民族誌的地域として固定され、しかも、その中での調査単位として「部族」を固定していった。

現在の研究者も、このような認識に規定されている面があるが、パーキンはこのような地域

設定をview from the officeと呼び、批判している。そして、それに対置するものとして、voice from the fieldを提唱している。調査対象の人々の声が反映しているような研究と言えるだろう。従来の固定的な枠組みから自由であった数少ない人類学者の例として、A・サウゾルも忘れてはならない。二人ともが、都市人類学のパイオニアとして知られていることは、全く偶然ではないだろう。

植民地時代では「オフィスの観点」が非常に明確で、植民地支配の実際的な問題があったが、現在はオフィスの観点にしても、フィールドからの声にしても、双方が非常に多元化して錯綜している状態である。人類学だけでなく、他の社会人文科学の諸分野も含んだ地域研究の単位を新たに設定することは、非常に困難な作業となるだろう。「地域」とは研究者の関心や、アフリカの人たちの意識と実践のあり方によって、いかようにも設定できる。アフリカの地図を明確な境界をもつ地域単位に分割し、それに普遍的な意味合いを持たせることは不可能に近いという印象がある。

質疑応答

應地利明 環境利用の点で差を持ちながらも、お互いに共存しあったような流動的共同空間という社会が形成され、地域という形で細分化できないというお話だった。だが、翻って考えれば、バントゥ的な世界によって覆われている、例えばサハラ以南のブラックアフリカの地帯は、一つの大きな意味でのユニットをなしているとは考えられないか。

掛谷 アフリカの地域性にかかわる基本的な問題だと思う。サハラ砂漠の南縁に沿って展開するサヘルと呼ばれる地域は、8世紀ごろからイスラーム世界と交易があるし、東海岸のスワヒリも長いアラブとの歴史がある。そういう世界と対比しながら、バントゥの広がる地域も一つの世界として認められるのではないかという指摘だと思う。しかし我々

アフリカ研究のフィールド派は、外文明を重視してアフリカを捉える基本認識では、19世紀末以後の、ヨーロッパ世界による圧倒的な支配に打ちのめされてきたアフリカ像が肥大してくるように思えてならない。高谷流の「外文明」というのは、東南アジアのような文明の狭間の地域から出てきた地域認識の方法だろう。

アフリカでも、外文明との関係で違いがあることは明瞭だが、外文明との関係を基本においた地域認識によって、打ちひしがれた大陸というイメージに結びつきかねない。高谷論に対抗していこうとすれば、もっと全面的に議論を展開しなければならないだろう。

高谷 アフリカに魂から打ち込んでいる方の真摯な研究態度には頭が下がる。これは研究

者の姿勢にも関わる問題だと思う。ただ、應地さんの質問に対する答えは、北のサヘル、東のスワヒリという、外の世界に染まった所に囲まれた中に珠玉のアフリカがあるということで、やはり疎開林から熱帯多雨林にかけて、そこには一つの「世界単位」的な空間があると解釈していいのではないか。

掛谷 サヘルやスワヒリの世界は、「世界単位」に乗りそうな地域だ。しかし、基層部には、ここで述べたような特質を共通して持っているように思える。すると、どちら側に重心をおいてアフリカを語るかという視点の違いになる。高谷流に乗れと言われれば、サヘル、スワヒリをひっさげて乗れなくもない。しかし土着派としては、そういう気持ちにならない。

石井 博 「民族」と「部族」という言葉の関係について、少し明確にしておいた方がいいのではないか。「民族」という言葉は「部族」よりも少し継続性があるように思う。民族も離合集散し、再編成され、変容していくものだろうが、なおかつ言語や文化とからみあって、少し継続性があるという印象を受けた。その中で、「部族」という言葉が使われた時には、これが段階なのか類型なのかかわからないが、それほど長くは続かないもののような印象があった。その関係について、もう

少し説明がほしい。

それから、パントゥ全体が民族であるかどうかという問題もある。民族には、かなりの重層性があるが、分布をもっているはずだ。少なくとも、ある時間の幅で考えた場合には分布をもっている。そういうものを考えるときに、地域性との関わりが当然出てくるだろうと思われる。

掛谷 「民族」か「部族」かというのは、未だ決着のついていない問題で、アフリカ研究の核心にふれる質問だ。植民地化の歴史を背景として、「部族」というと「プリミティブ」に結び付く側面がある。アフリカ研究者の中でも、「部族」派と「民族」派とに分かれている。私は、今日は「民族」で通したが、基本的には「部族」派だ。

ここでは、より強大な中心性を持った集団を構築していく方向に視点をおいてアフリカを認識するのではなく、小さな単位の共存性を維持してきたという視点からアフリカを捉え、「民族」という言葉を使い、さらに「小世界」という言葉で展開していった。アフリカ研究者としては、ある意味では苦慮した点だ。

「部族」か「民族」かというのは、非常にナイーヴでセンシティブな問題を含んでおり、アカデミックなタームとして定義するのは困難だと思う。